

# 日本の全社的品質管理(TQC)の特徴

第44回品質管理シンポジウム (主催:日科技連, 1987年6月)

- ① 経営者主導による全部門, 全員参加のQC活動
- ② 経営における品質優先の徹底
- ③ 方針の展開とその管理
- ④ QCの診断とその活用
- ⑤ 企画・開発から販売・サービスに至る品質保証活動
- ⑥ QCサークル活動
- ⑦ QCの教育・訓練
- ⑧ QC手法の開発・活用
- ⑨ 製造業から他業種への拡大
- ⑩ QCの全国的推進活動

NDP

No.4

さて、今申し上げました、日本の品質管理の歴史の中で、日本の全社的品質管理のコンセプトはどんな形に固まったのでしょうか。そこで、1987年6月に開催された、日本科学技術連盟主催の第44回品質管理シンポジウムでまとめられた「日本の全社的品質管理(TQC)の特徴」を紹介しましょう。これは、戦後の日本復興に大きな役割を果たした、TQCの成功要因を集約したものと捉えられています。日本の品質を世界最高水準に押し上げたTQCの特徴は、これから申し上げる10点となります。【】

① 第一点目は、「経営者主導による全部門, 全員参加の活動」であること。

その内容は、■トップマネジメントのリーダーシップによって企業内に展開されている。■品質の意味を広くとらえ、コスト・納期・安全、さらには仕事の質などに拡張して活動の対象にしている。■親企業を中心に、子会社・関連会社、協力会社を含めたグループワイドの活動を行っている。外部コンサルタントの指導は受けるが、企業が自主的に活動を推進している、ことなどがあげられます。【】

② 第二点目は、「経営における品質優先が徹底」していること。

その内容は、■企業経営において、品質優先・品質第一主義の徹底が長期的な利益確保につながるという思想が一般化している。■トップマネジメントの品質に対する関心の強さが重要であるという認識がある。■QC活動をコスト・納期・安全・仕事の質などに拡張することが効果的であると考えられている。この考え方がパブル時に希薄になり、現在の日本企業として最も反省すべき事項と思っています。【】

③ 第三点目は、「方針の展開とその管理」を確実に実行する仕組みを開発したこと。

その内容は、■トップマネジメントの方針が、各部門・各階層に展開され、その実施状況がコントロールされている。■この方針の中心には、品質は勿論経営全般の方針が含まれる。■方針達成のためには、PDCAサイクルを着実に回すことが必須であると理解されている。■具体的な実施システムとして、方針管理・日常管理などの名称で、運営手順が決められている。【】

④ 第四点目は、「QC診断とその活用」が行われていること。

その内容は、■QCの実施状況を診断し、その結果を改善の施策につなげていく方法が一般化している。■通常、この診断にはトップマネジメントが参加する。■社内の診断だけでなく、中立機関による診断(デミング賞、JIS表彰)に権威があり、企業のQC推進に貢献している。■消費者による診断、国際的な認証制度など、第三者による診断が活用できるようになっている。【】

⑤ 第五点目は、「企画・開発から販売・サービスにいたる品質保証活動」が展開されていること。

その内容は、■品質保証のための社内組織を横断的に、一貫した活動が実施されている。各部門の役割分担を表した「品質保証体系図」が利用されている。■特に、開発、設計段階における品質展開やデザインレビューを重視している。■各段階とも品質を造り込むプロセスを重視している。■業種によっては、PPMオーダーの品質保証が実施されている。技法の不断の改善と開発が、品質保証力を支えています。【】

⑥ 第六点目は、「QCサークル活動」の推進。

その内容は、■TQCの一環としてQCサークル活動が展開されている。■QCサークル活動の基本理念として「QCサークルの基本」などが制定されており、人間性尊重の思想が尊重されている。■QCサークル本部・支部などの全国推進組織があり、この組織は学会・産業界の協力により自主的に運営されている。■企業内にも経営者・管理者・スタッフを含めた支援のための組織がある。■第一線従業員の教育訓練コースに、QCサークル活動を組み入れている企業が多い。【】

⑦ 第七点目は、「QCの教育・訓練」が組織的に行われていること。

その内容は、■トップから第一線従業員にいたるまで、職位・職能に応じた教育訓練が実施されている。■教育・訓練のカリキュラムは単なる講義だけでなく、ケーススタディや問題解決の実務訓練が組み込まれている。■教育・訓練の方法としては、座学の他に演習、グループ討論が多用され、自主的な学習が行われている。■社内コースだけでなく、社外の教育コースや、通信教育、洋上セミナーなどが計画的に利用されている。【】

⑧ 第八点目は、「QC手法の開発・活用」が盛んであること。

その内容は、■統計的手法を基盤としたQC手法が広く活用されている。■QCの適用範囲が広がるにつれ、信頼性やオペレーションズ・リサーチの手法、多変量解析などの高度な手法が活用されている。■新製品開発や品質保証のための手法が開発、活用されている。■簡単でやさしい手法が効果的に使われており、QCサークル活動の重要なツールになっている。【】

⑨ 第九点目は、「製造業から他業種へ」TQCが拡大していること。

その内容は、■QCの適用範囲が、製造業や製造部門だけでなく、事務・販売・サービス部門に拡大されている。■業種としては、建設、ホテル、病院などに広がっている。■他業種においてもQCの基本的な考え方は同じであるが、それぞれに特殊性を考慮した展開法が工夫されている。【】

⑩ 第十点目は、「QCの全国推進活動」が行われていること。

その内容は、■全国的レベルでの推進活動が定着している。例えば、11月の品質月間行事、10月の標準化月間行事など。■日本科学技術連盟、日本規格協会がら雄心になり、各種行事の規格、事務、書籍刊行などを行っている。■QCサークル本部・支部などの全国的推進組織がある→ポスター説明。

以上の10項目が日本のTQCの特徴でした。またこの10項目には、日本の全社的品質管理を支える様々な技法についても言及されている点が特筆されます。

現在のTQMIは、今申し上げた「日本の全社的品質管理の特徴」を基盤に近年新たな体系として見直し、「TQMの全体像」や「TQMのフレーム

## TQM ; 総合的品質管理とは...

### ● 体制

☒ すべての人が、すべての部門で、すべての段階で...

### ● 方法

☒ QC的ものの見方・考え方で...

☒ QC手法を活用して...

### ● 目的

Q品質向上 C原価改善 D売上・生産量拡大・納期短縮  
S安全維持 M意欲・士気高揚 E環境保全 ...を図る

### ● 組織の存在価値を高める次の満足を実現する

組織自身 顧客 供給者 組織内の人々  
オーナー・株主 地域社会・国際社会 地球環境 ...

NDP

No.5

さて、それでは、TQMとはどんな概念・言葉の意味を持っているのでしょうか。それは次のように概括できます。【】

体制は、トップマネジメントから第一線、グループ企業などまでを含むすべての人が、【】  
組織内のすべての部門で、【】

利害関係者の期待とニーズに応える製品・サービスを研究開発し、設計・製造・販売、アフターサービスという組織活動におけるすべての段階で...】

方法は、QC的ものの見方・考え方で、【】  
QC手法を活用して...】

目的は、Q品質向上、C原価改善、D売上・生産量拡大・納期短縮、S安全維持、M意欲・士気高揚、E環境保全などを図る。

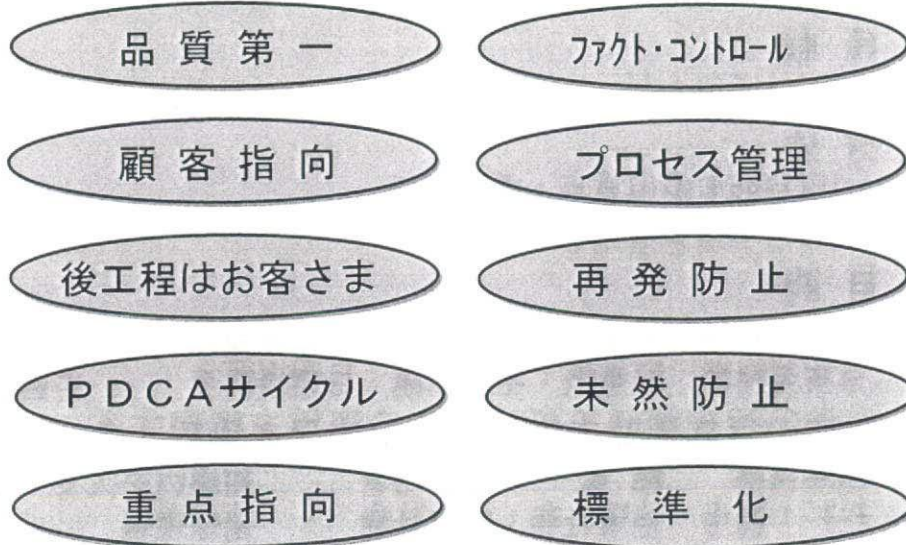
TQMで言う品質は、これらの対象すべてを含む総称になっています。】

そして、組織自身・顧客・供給者・組織内の人々・オーナー／株主・地域社会・国際社会・地球環境という色々なステークホルダーの満足を実現していこうというものです。

前田のTQMとは何かを問われた場合、当社ではTQMの定義付けを行っておらず、その考え方は上記のもので、極めてシンプルで、オーソドックスですが、今でも変わることはないコンセプトです。組織として、変わることはないTQMのコンセプトを持つことが大事であると考えています。】

参考文献 QC的ものの見方・考え方 細谷克也著 日科技連

## QC的ものの見方・考え方



NDP

No.6

それでは、TQMの骨格をなす「QC的ものの見方・考え方」のコンセプトをご紹介します。それは、次の10のコンセプトが重要となります。【】

- ①第一点目は、品質第一。その意味は、品質を優先的に第一に取り上げ、顧客が魅力を感じて買ってくれ、使ってみて、喜んでもらえるような、品質保証された、満足度の高い製品やサービスを作り出していくことです。【】
- ②第二点目は、顧客指向。消費者指向ともいわれます。その意味は、消費者や顧客が欲する、喜んで買ってもらえる製品やサービスを作っていくという考え方です。【】
- ③第三点目は、後工程はお客さま。その意味は、自分の工程で作出した品物やサービスの受け手、いわゆる後工程をお客さまと考え、後工程に対して良い品質のものを提供するため、自分の担当した業務を確実に処理して次の担当者に受け渡すことです。【】
- ④第四点目は、PDCAサイクル。プラン・ドゥ・チェック・アクションの略称です。その意味は、管理に当たっては、まず計画を立て、それに従って実施し、その結果を確認し、必要に応じてその行動を修正する処置をとるサイクルのことです。管理とは、PDCAサイクルを回すこととも言えます。【】
- ⑤第五点目は、重点指向。その意味は、改善効果の大きい重点項目に着目し、これを攻撃するという考え方。【】
- ⑥第六点目は、事実に基づく管理。その意味は、経験や勘にのみ頼るのではなく、データや事実に基づいて管理することです。【】
- ⑦第七点目は、プロセス管理。その意味は、結果のみを追うのではなく、プロセス、いわゆる仕事のやり方に着目し、これを管理し、仕事の仕組みとやり方を向上させること。【】
- ⑧第八番目は、再発防止。その意味は、問題が発生したときに、プロセスや仕事の仕組みにおける原因を調査して取り除き、今後二度と同じ原因で問題が起きないように対策を実施すること。【】
- ⑨第九番目は、未然防止。その意味は、実施に伴って発生すると考えられる問題を予め計画段階で洗い出し、それに対する修正や対策を講じておくことです。【】
- ⑩第十番目は、標準化。ものや仕事のやり方について標準を決め、これを活用することです。

TQMの全体像を知り、QC的な考え方と技法を習得した人材を育て、組織の変化への対応力を強化していく運動論が極めて重要と考えています。【】

参考文献 品質経営システム構築の実践集 細谷克也編著 日科技連

# Q C 手 法

## ● QC七つ道具

- ☒特性要因図, パレート図, グラフ, チェックシート, ヒストグラム, 散布図, 管理図 (層別)

## ● 新QC七つ道具

- ☒連関図法, 系統図法, マトリックス図法, 親和図法, アローダイヤグラム法, PDPC法, マトリックス・データ解析法

## ● 統計的方法

- ☒検定・推定, 実験計画法, 相関・回帰分析, 多変量解析, 最適化手法...

## ● その他の手法

- ☒サンプリグ法, 抜取検査法, 官能検査法, 信頼性工学...

## ● QC周辺的手法

- ☒IE, VE, OR, 創造性開発...

NDP

No.7

TQMでは、事実をデータでつかみ、バラツキのある現象を統計的に処理し、その結果に基づき客観的に行動するアプローチが強調されています。

数多くの原因が複雑な形で影響しあっている状況から、因果関係を正しく把握し、客観的な判断を下す上で、QC手法は欠くことのできないものです。

QC手法はおおよそ次のようなものがあげられます。【】

QC手法と言ってもいろいろなものがあります。

①最もポピュラーなのがQC七つ道具と言われる、初級統計的手法です。手法としては、特性要因図、パレート図、グラフ、チェックシート、ヒストグラム、散布図、管理図や層別などがあります。

これらの手法は、トップマネジメントから現場作業員にいたるまで各階層で使うことができます。また、企画・設計から製造、販売にいたる全部門での適用もできます。

日本の品質管理の基礎を築いた石川馨先生は、「企業内の問題の95%はこの七つ道具の活用で改善できる」とおっしゃっておられます。【】

②今では、QC七つ道具に加えて、主に言語情報を扱う新QC七つ道具が開発されました。

手法としては、連関図法、系統図法、マトリックス図法、親和図法、アローダイヤグラム法、PDPC法、マトリックス・データ解析法があり、設計開発段階や方針管理などで使われています。【】

③統計手法としては、検定・推定、実験計画法、相関・回帰分析、多変量解析、最適化手法などがあり、技術者やQC部門者が習得し、実務で活用が図られています。

特に、複雑な工程解析、品質解析には欠かせない手法です。【】

④その他の手法として、サンプリグ法、抜取検査法、官能検査法、信頼性工学などがあります。【】

⑤また、QC周辺的手法として、IE, VE, OR, 創造性開発の手法があります。

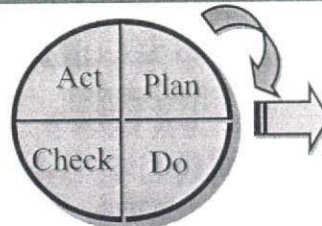
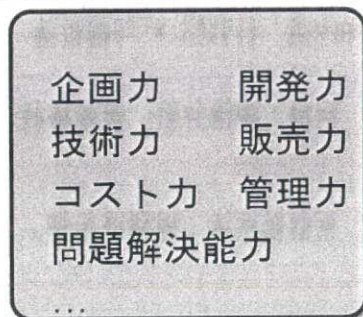
これらの手法を、組織が改善しなければならない課題に対し、柔軟に使いこなしてきたことが、日本の工業製品の優秀さを支えています。【】

## TQM推進の目的・成果

企業体質の改善



企業のを高める



仕事のやり方  
を  
充実・向上

NDP

No.8

それでは、ここでTQMを推進することの目的やその成果を整理してみましょう。【】

この図にあるように、TQM推進の目的ないしは成果は、「企業体質の改善」です。

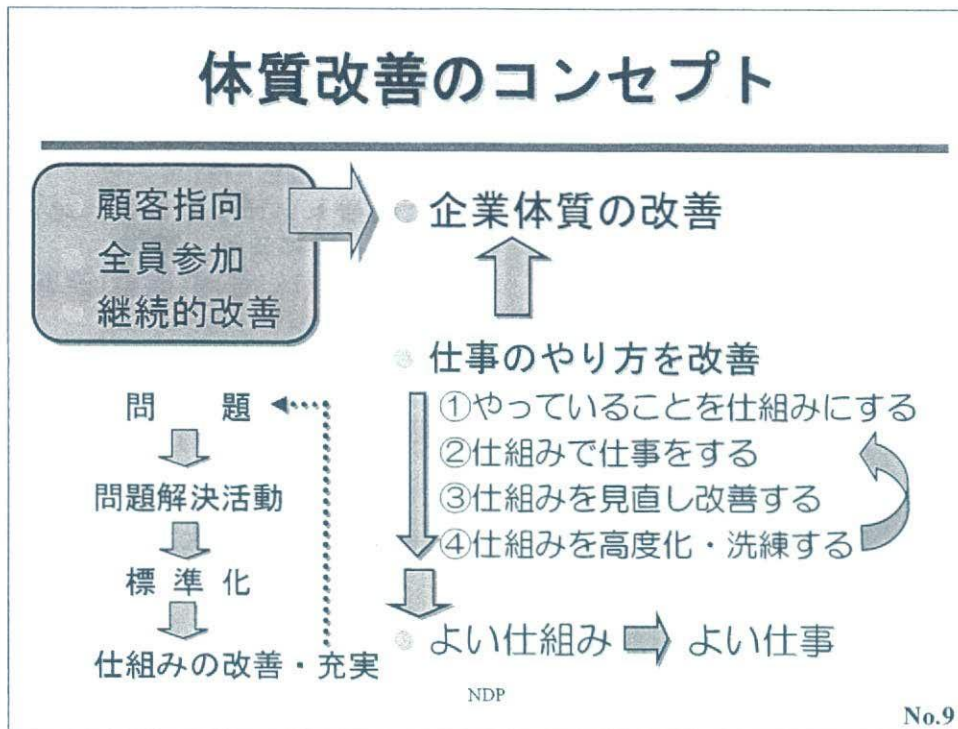
それでは企業体質の改善とは何でしょうか。それは、利害関係者の期待とニーズ応えながら、持続的に成長するための企業のを高めることです。

企業のは、各々の企業によって特色は異なるとは思いますが、企画の力、開発の力、技術の力、販売の力、また組織の人々が持っている問題解決の力などがあるでしょう。

そして、PDCAと言う管理のサイクルを継続的に回して、仕事のやり方や仕組みを、継続的に充実・向上していくことにより、企業のを高め、企業の体質改善を図っていきます。【】

参考文献 QC的ものの見方・考え方 細谷克也著 日科技連

# 体質改善のコンセプト



体質改善のコンセプトをご紹介します。【】

TQMの神髄は、顧客指向、全員参加で、継続的改善を行うことに集約されます。

改善は、問題発見能力を高めて問題点を摘出し、問題解決活動を行い、改善結果を標準化し、仕組みの改善・充実を図るという、サイクルを回していくことにより進めます。【】

この成果として、企業体質の改善が実現します。【】

仕事のやり方の改善の原則は、まず①やっていることを仕組みにする、②その仕組み通りに仕事をする、③仕組み通りに仕事をする中で発生した問題点などにより、仕組みを見直し改善する、そして④仕組みを高度化・洗練すると言うステップを踏みます。【】

その結果、よい仕組みができるにつれて、よい仕事ができるようになります。【】

参考文献 QC的ものの見方・考え方 細谷克也著 日科技連

## 自己革新する... “卓越した組織”へ...

### TQMのねらい

- ☑ 企業目的達成への貢献  
存在感ある組織の実現  
組織使命の継続的達成  
利害関係者との良好な  
関係性・満足度向上
- ☑ 顧客満足の高い品物・  
サービスの提供  
顧客の視点  
質の追究
- ☑ 組織力の向上  
コア技術・スピード・活力

### TQMのフレームワーク

- ☑ 経営トップのリーダーシ  
ップ、ビジョン、戦略
- ☑ 管理システム(管理・改善・改革)
  - ・ 経営管理の諸システム
  - ・ 品質保証システム
  - ・ 経営要素管理の諸システム
- ☑ 主要経営基盤の充実
  - ・ 人材の育成
  - ・ 情報の活用
- ☑ 基本的考え方と手法
  - ・ TQMの考え方・価値観
  - ・ 科学的手法

NDP

No.10

更に、卓越した組織へのシナリオは、いわゆるTQMがベースになるものと考えています。重要なことを整理したいと思います。今の日本のTQMのコンセプトとなるものです。】

まずTQMの狙いは何かを確立すること。

代表的な狙いを挙げますと、...

第一番目は、企業目的達成への貢献。それは、存在感ある組織の実現、組織使命の継続的達成、利害関係者との良好な関係性・満足度向上を意味します。

二番目は、顧客満足の高い品物とサービスの提供。顧客の視点で、質の追究を極めなければなりません。

三番目は、コア技術・スピード・活力という、組織力の向上。】

そして、それを支えるフレームワークをしっかりと認識し、自組織の中で咀嚼し、実践すること。

この図は、TQMの全体像を示しておりますが、組織ごとにTQMの狙いやフレームワークに対する取り組み方法が異なるのは、当然として、不可欠な要素として認識しなければならないと思います。】

---

# 建設業におけるTQMの実践

NDP

No.11



## TQM推進のステップ

---

1. トップの決断
2. 階層別の教育
3. 職位・職能に応じた改善活動
4. 部門別管理(日常管理)の仕組みの透明化
5. 部門横断的な活動(機能別管理)の仕組みの透明化
6. 方針管理への取り組み
7. トップのリーダーシップ
8. ストレッチ目標への挑戦
9. 持続的な改善・改革

NDP

No.12

さて、これからお話しすることもあわせて、私の会社でのTQM推進の大まかなステップをまとめました。】

第一番目は、なんといっても、経営の道具でTQMを使ってみようというトップの固い決意、信念が不可欠です。】

2.そのもとで、小さな事務局が設置され、品質管理教育が始まります。

品質管理教育により、正しい倫理観のもとで科学的思考を持った、問題解決力の高い人が育ってきます。】

3.それらの人がエンジンになり、組織内のあらゆる所で改善活動を 進めます。】

4.まず手始めは、各部門で日常行われている業務の仕組みを明確化し、問題点の改善を進めるといいでしょう。】

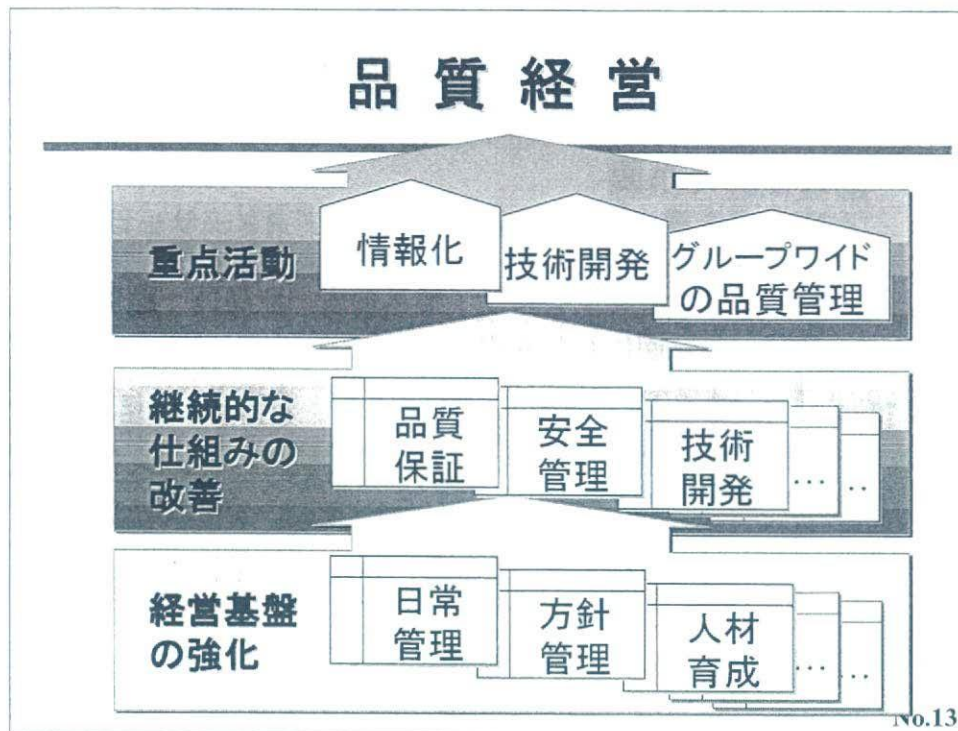
5.そうしている内に、部門間の連携が必要な仕組みの明確化と改善が 必要になってきます。安全管理、品質保証と言った機能別管理への 取り組みです。】

6.ここまできますと、仕組みという概念やその改善技法が身に付いてきますので、今まで解決できなかった経営課題に対する方針管理への取り組みも容易になってきます。】

7.この段階でさらに、活動を飛躍するためには、トップの活動推進に 対する強い熱意が求められます。】

8.この時点で、ISO、日本品質奨励賞、デミング賞といった高い 目標を掲げた挑戦が必要になる時期でもあります。】

9.そして、持続的な活動の推進にして参ります。】



当社はTQM, 総合的な品質管理を軸に, 品質経営を進めています。

それでは, 品質経営とは何か。

次のように考えています。】

第一番目は, 人材育成や方針管理・日常管理といった経営基盤強化の ための基礎となる活動であり, TQM推進で大変大きな役割を担っています。】

第二番目は, 品質保証を中核として色々な仕組みを継続的に改善していく活動。

品質保証, 安全管理, 技術開発などの仕組みやプロセスの継続的な 改善は, この分野の重要な取り組みに位置づけられます。

大切なことは, 問題解決能力を持った人材が育っていなければ, この 活動は進まないという点です。】

第三番目は, 長期的視点から戦略的に投資を行い, 経営課題を重点的に革新・改革して行く活動であり, 】

当社の場合は, 情報化, 】

技術開発, 】

グループワイドの品質管理活動などが挙げられます。

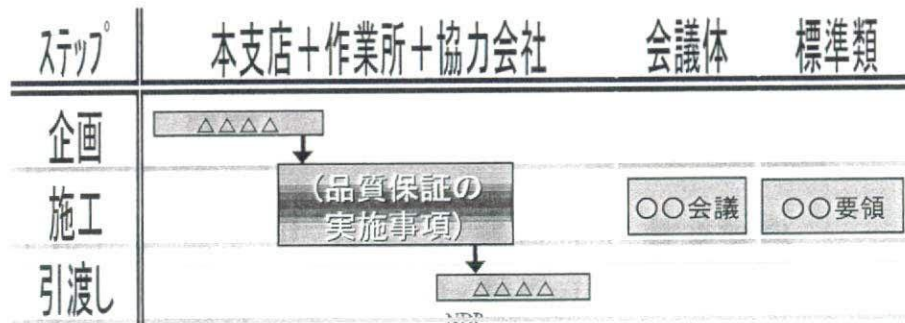
前田のTQMは, 品質経営を押し進めるための, 経営のツールという位置づけにあります

【】

## 品質保証体系図(概念)

### 品質保証体系図

☒Q0品質企画, Q1営業～Q8引渡し, Q9アフターサービス, Q10品質評価に至る11ステップに分け, 各ステップで品質保証上実施する事項・担当部署・会議体・標準類を定めて流れ図にしたもの



No.14

品質管理の基本は、品質保証です。

これは、品質保証体系図の概念図。原本は、A3版で2枚。土木と建築、設計施工と設計施工分離の、計4種類があります。

縦軸は、品質企画、営業、施工準備、施工、引渡し、そして品質評価までの11ステップの品質保証のプロセスが示されています。

横軸は、顧客・本店・支店・作業所・協力会社などの関係部門が示されます。

縦軸と横軸に囲まれた空間に品質保証活動に必要な実施事項と関連部門を明示し、その時に用いる標準類・帳票を右端に記載してあります。

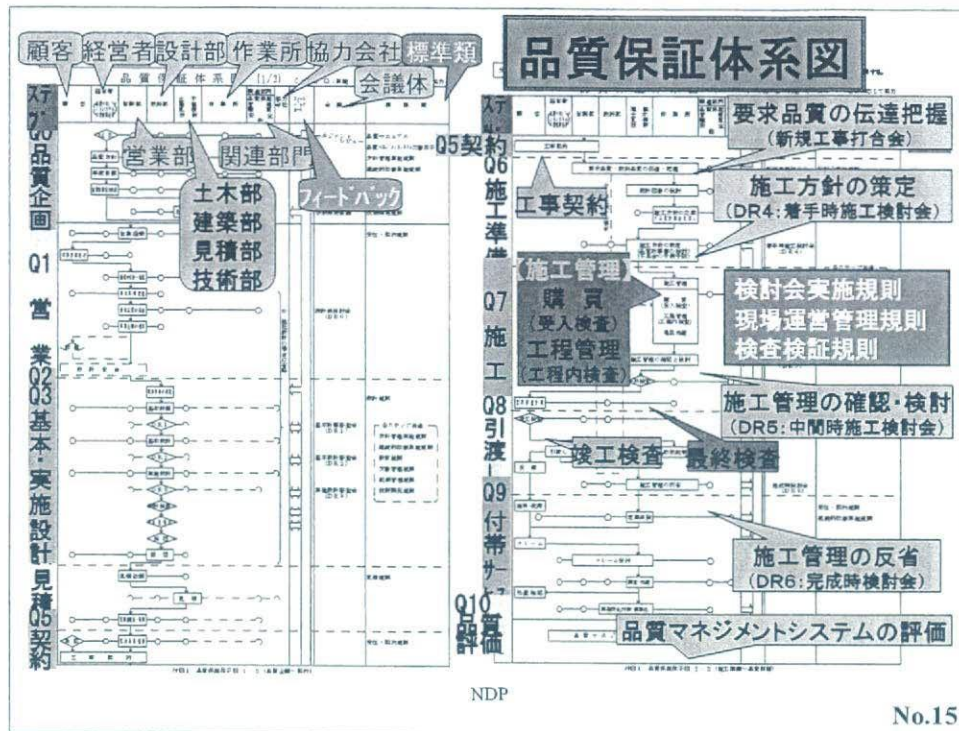
品質保証体系図は、品質保証活動の骨格を透明性をもって表したもので、すべてのプロジェクトに適用され、品質保証活動のバラツキを押さえるだけでなく、品質保証に関するノウハウの集約であり、標準類を通して知識の伝承がなされます。

建設プロジェクトの進行に伴い、すべての職員が実務で管理方法を学習、習得し、実践していきます。

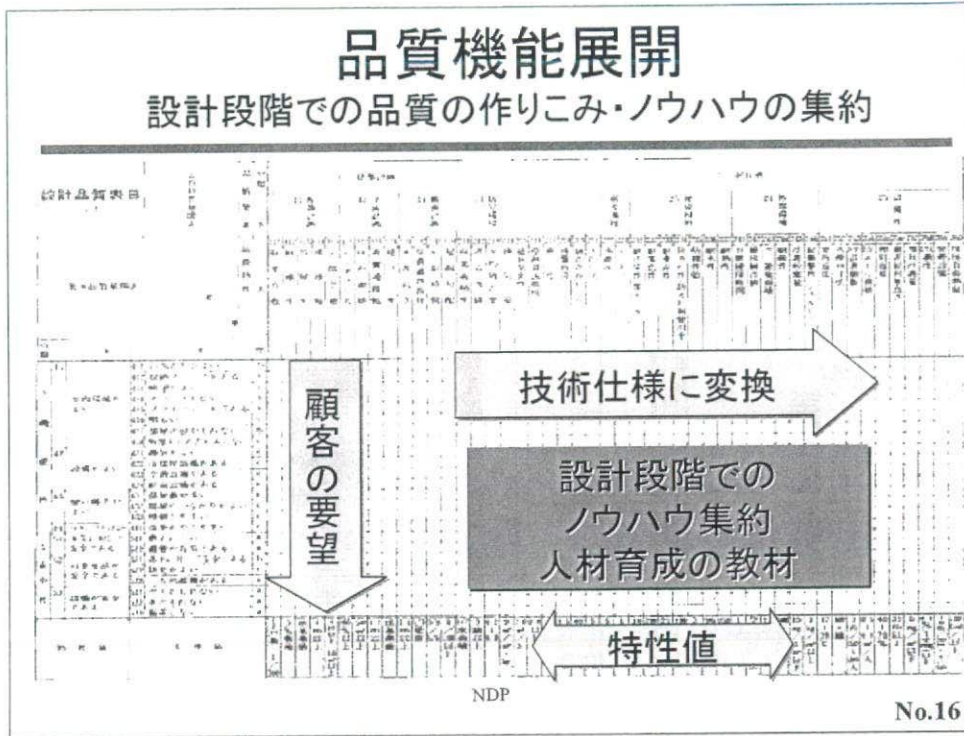
そして、標準類を改善活動で直すことにより、仕組みをよりよいものにしていきます。その活動範囲は、本社スタッフの全社体系の改訂から協力会社の作業標準の改廃までに及びます。

このためには、常に時代に適応した仕組みに自律的に改善していけるように、個々人の問題意識の高揚とスキルアップを図っていくことが、不可欠でありましょう。これが、「継続的な仕組みの改善」の大切さであり、品質、安全、コストなどの全ての事業分野で、継続的改善の取り組みが行われることが大切です。改善は、人材育成の大きな実践道場でもあります。

】



(図の説明)



これは、品質機能展開の基本図表。設計段階での品質の作り込みの重要な様式であり、ノウハウの集約でもあります。【】

縦軸は、...(内容の説明)【】

横軸は...(内容の説明)【】

そして、最下段に、保証すべき特性値。この数値は会社の固有技術の差が出てくるところ。【】

機能展開図は、施工物件ごとに作成されるものではなく、類似物件が転用されて行きます。特殊な物件とか、始めて取り組む物件などで新規に作成されます。これは、設計段階での会社のノウハウを集めたものであり、新人設計者育成などの教材として、設計の品質の保証、又は他社との設計能力の差別化につながります。【】



## TQMの視点での安全管理の要諦

1. 実践に裏付けられた安全の仕組み整備と標準化
2. 標準に照らし合わせた改善が原点
3. 協力会社主導の自主的な安全管理活動が持続性を保証する
4. 教育に始まり教育に終わる
5. 透明性あるトップの意思が意識の改革を促す
6. TQMの全体像を知った上で、活動の重点を絞る

NDP

No.18

TQM導入以来、現在までの安全管理活動の推進を顧みると、教訓として、次のことを学びました。】

第一点目。実践に裏付けられた、頭で考えたものではない実務に密着した安全の仕組みを泥臭く整備し、誰もが分かり実践できるように、目に見える形に標準化しなければ、安全の確保はおぼつかないこと。】

第二点。標準に照らし合わせて改善していくことが原点であること。】

第三点目。現場で実際に働く協力会社の人々が自ら主導し、自らの意思に基づく自主的な安全管理活動が、安全管理を昇華していく活動の持続性を保証すること。】

第四点目。教育に始まり教育に終わると言うこと。無手勝流にならないように、原理・原則や改善のスキルアップを図らなければ、効果的な安全管理の仕組みは構築できません。】

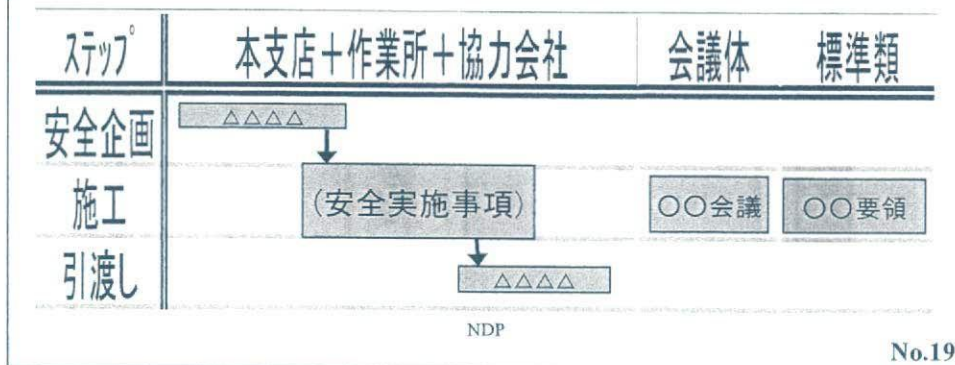
第五点目。なんとと言ってもトップのリーダーシップがなければ活動が進みません。トップの強い意志が公開され、隅々まで浸透していくことが、安全管理に対する意識の改革を飛躍的に進めます。】

第六点目。活動の重点を絞る選択肢は、数多くありましょう。重点を絞り込むには、TQMの全体像を知らなければ、的確な舵取りは不可能と思っています。

】

# 安全管理体系図

## ● 安全管理体系図の概要



ここで、安全管理体系図の概念をご紹介します。

縦軸は、安全企画、施工準備、施工、引渡し、そして安全評価の5フェーズに分かれています。

横軸は、顧客・本店・支店・作業所・協力会社に通常分かれます。

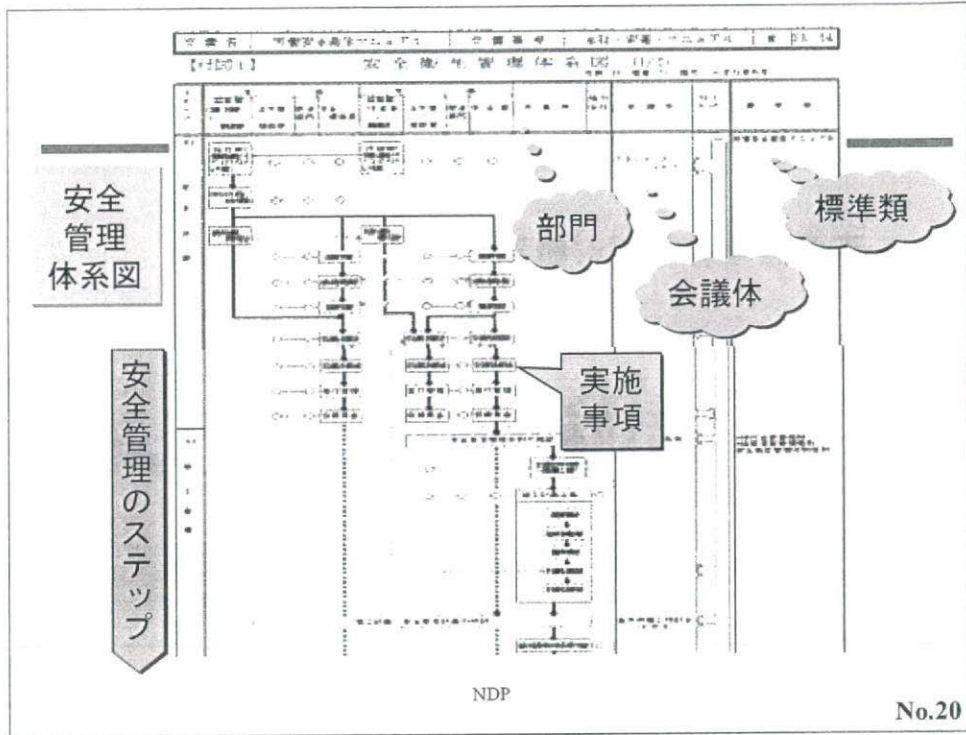
縦軸と横軸に囲まれた空間に安全活動に必要な実施事項と関連部門を明示し、その時に用いる標準類・帳票を右端に記載してあります。

いわゆる品質保証体系図と呼ばれるものの、安全版です。

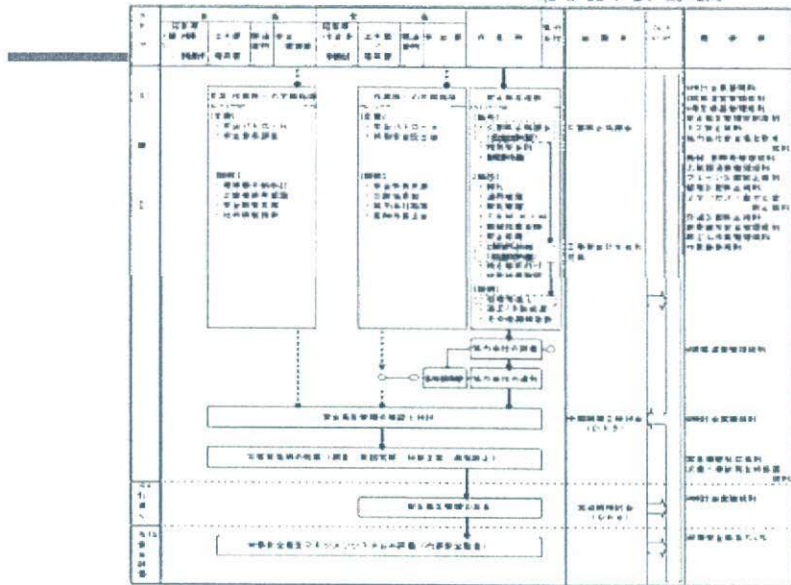
安全管理体系図は、安全活動の骨格を透明性をもって表したもので、すべてのプロジェクトに適用され、沢山の人が関与する安全管理活動のバラツキを押さえるだけでなく、安全に関するノウハウの集約であり、標準類を通して知識の伝承がなされます。

そして、標準類を直すことにより、仕組みをよりよいものにしていき、企業の競争力を高めます。改善の範囲は、協力会社の作業標準の改廃から本社スタッフの全社体系の改訂まで及びます。そして、常に時代に適応した仕組みに自律的に改善していくため、個々人の問題意識の醸成とスキルアップを図っていくことが不可欠でありましょう。】





安全管理体制構築マニュアル



NDP

No.21

## フェイス・トゥ・フェイス 三現主義で現場のコミュニケーション

- 泥臭く、実践的なKYK（危険予知活動）



NDP

No.22

建設業では事故を未然に防ぐ色々な工夫が現場で実行されています。  
これは、作業現場でおこなっているKYKの事例。

これは、現場らしい泥臭さを感じさせる写真です。どんな場所でも、工夫次第で、活動は進められる。

今までの標準の木目細かさだけでは押さえ込むことが出来ない、ポカミスに近い事故を防止するために、泥臭くて現場に密着した危険予知活動を展開しているわけです。

重要なことは、今日行う仕事に潜む危険をみんなの知恵を出し合って見て、各人の問題意識を高めると共に、安全に関する貴重な経験の伝承を行っていることでしょう。【何せ、実際やる人が自ら考え、問題意識を持って、自覚しなければ、安全な作業の実行は不可能です。】

## 危険予知活動（KYK）

### ❖ 目的

- ☒ 危険に対する一人ひとりの感受性を高め鋭くする
- ☒ 作業に潜む危険性について、一人ひとりが共通の認識を持つようにする
- ☒ 「自分たちの安全は、自分たちで守ろう」とするチームワークを高める
- ☒ みんなで参加し、みんなで発言し、みんなで合意し、決めたことを自主的に守るようにする

### ❖ 4ラウンド

- 1) 現状把握⇒2) 本質追究⇒3) 対策樹立⇒4) 目標設定
- ☒ 作業開始にあたり；ワホ<sup>°</sup>イント指差呼称とタッチ・アント<sup>°</sup>・コール

NDP

No.23

危険予知活動(KYK)は、一般的に安全朝礼を終えたあと、作業を一緒にするグループに分かれて行われます。】

その目的は、

第一点は、危険に対する一人ひとりの感受性を高め鋭くする

第二点は、作業に潜む危険性について、一人ひとりが共通の認識を持つようにする

第三点は、「自分たちの安全は、自分たちで守ろう」とするチームワークを高める

そして、第四点は、みんなで参加し、みんなで発言し、みんなで合意し、決めたことを自主的に守るようにする、というものです。】

毎回のKYKは、1)現状把握⇒2)本質追究⇒3)対策樹立⇒4)目標設定の4ラウンド構成で活動が進められます。

そして作業開始に当たり、ワホ<sup>°</sup>イント指差呼称とタッチ・アント<sup>°</sup>・コールで締めくくります。

指差呼称は、何もしない時より誤りの発生率が1/3になると言われています。また、タッチ・アント<sup>°</sup>・コールは、お互いに体の一部を触れ合って指差しし、唱和することで、一体感・連帯感・仲間意識を高めるために有効な方法です。

この活動で私たちが学ぶことは、建設現場で、毎日入れ替わる作業員によるチーム編成、そして技能レベルもバラツいている中で、作業の安全を確保するための仕組みを職場環境に合わせて工夫し、ノウハウを蓄積し、伝承していく重要性を示唆していることと思います。】